夏目漱石

辰野隆

夏目漱石

漱石の印象

明治三十八年、僕が一高に入学した年は、夏目先生は未だ一高で教鞭を把っていたが、その旁ら帝大文科で英文学を講じていたらしい。

一高では、先生は英語を教えていた。当時の二部（理、工、農）の或る級と一部（法、文）の或る級だけの受持ちで、僕等は一度でもいいから、先生の教えを受けたい

と念じながらも、三年間竟(つい)に先生の示教に接し得なかった。唯、時々、授業の始まる前に、先生が当年の本館から分館に通ずる廊下を、受持ちの教室へ歩いて行くのを見かけた。あれが『吾輩は猫である』の苦沙弥先生なのか、それにしても苦沙弥先生は東洋風の仙骨なのに、その生みの親は欧羅巴(ヨーロッパ)的なバタ臭い先生だと思って、僕は自ら微笑を禁じ得なかった。

或日、寄宿寮で、同室の、二部の友が、その日、教室で夏目先生の言った言葉を繰返して、面白そうに話して

いた。

「諸君をいちいち人格を有った人間だと思ったら恐ろしくって、講義なんか出来やしないよ。まあ、机から首が生えてるとでも思って、やってるんだ。」

当年の僕は、将来自分が、机から生え揃った首を眺めながら、苦しい講義をしようなどとは夢にも思わなかったから、友人の話を聴いて、ただ面白く、可笑しく、つり込まれて、アハハアと笑っていた。

神田の青年会館で、先生が「創作家の態度」という題

で講演したのは、僕が帝大法科の一年か二年の時分だったろう。僕は一番前列の席に陣取って、我が漱石の講演を一語も聴き漏らすまいと耳を傾けた。朝日新聞主催の講演会だったので、最初に、池辺三山居士が開会の辞を述べた。堂々たる偉丈夫で、国士の面影があった。それから、内藤鳴雪翁が東洋趣味に就いて飄逸（ひょういつ）な気焔を吐いたが、翁は話の途中で、ふところから薬壜（くすりびん）を取りだすと、「例に依って少々持薬を用いやす」と云って、一口二口薬を飲んだ。後できいたら、翁の薬というのは酒だった。翁の次ぎには何とか快天という半俗半僧のよう

な男が道話じみた話をしたが、僕は早く次の講演が聴きたかったので、快天の道話がすむのを待ちかねた。最後に夏目先生が演壇に現れた。

「先頃、或る雑誌を読んだら、夏目漱石という男は風上に置けぬ奴だ、と書いてありました。風上に置けない！　全(まる)で人を糞尿船(こえたごぶね)か何んかと思ってるんです。」

斯う言って先ず聴衆を笑わせてから、「今日の話は少々むずかしいぞ！」と断って、徐ろに「創作家の態度」に就いて語りだした。

僕の今まで聴聞した講演では、漱石先生のこの講演の

右に出るものは一つもない。その後、巴里で、ジャック・コポオがシェークスピヤに関する講演をしたのを、ヴィユウ・コロンビエ座で聴いたが、この二つの講演ほど強く僕を刺激した名講演にはその後未だ出会わない。その内容の充実した点に於いて、その趣味に富んだ、座談的な話し振りに於いて、僕は心の中で、ああ見事なものだと叫んだことがある。

「創作家の態度」から更に数年を経た或日、僕は一高の講演会で、先生の「模倣と独創」という話を聴いた。その時も、先生の卓見と話術の妙に聞き惚れたのであった。

先生が朝日新聞に『満韓ところどころ』を書き続けている頃だった。夏の終りか秋の初めか、或日の午後、駿河台下の電車の停留場で、先生が電車を待っているのをちらりと眺めた事があった。空がよく晴れ渡って、すべての物がはっきり瞳に映るような日だったので、瞬間の印象ではあるが、今でもその時の光景を覚えているのだろう。

最後に先生の顔を、それも久し振りで見たのは、今か

ら二十年前、僕が結婚した日であった。妻の姉がかねて漱石先生に私淑していたので、妹の結婚披露に先生を招待したのであった。その事は今年の夏、「改造」に『「明暗」の漱石』と題する拙稿の中に書いた。

先生逝いて既に二十年、いまそかりし昔は頗る縁がうすく、遥かに敬慕の念を寄せながら、公開の講演以外には親しく教を受ける栄も得られなかったが、死後の文豪漱石は、その全集に拠って、今もなお示教して、僕の如き眇（びょう）たる文学研究の一学徒をも常に啓発してやまぬの

である。

明治、大正、昭和を通じて、夏目先生ぐらい立派な弟子を数多く持った文豪は恐らく罕（まれ）であろう。之は全く大した事である。文豪漱石としてのみならず、人間夏目金之助としての名誉である。

（昭和十年秋）

『明暗』の漱石

畏友小宮豊隆氏から近業『漱石襍記』を贈られ、その中の『「明暗」の構成』と題する、情理兼ね備わる批評を特に面白く読んで、啓発せらるるところが頗る多かった。

『明暗』が朝日新聞に連載されたのは、今から殆ど二十年前であった。つい昨日のようにも思いながら、数えて見ると二昔前なのだから、あの時分から俺も二十年の馬齢を加えたのかと、今更のように、秋たつや何に驚く陰

明師という句がそぞろに思い出される。二十年前、僕は毎朝寝床の中か、さもなくば、顔を洗って食卓に倚りつつ、朝飯の運ばれるのを待つ間に『明暗』を読むのが、その日その日の楽しみであった。作者がこの力作を書き了らずに逝いたのは甚だ残念であったけれども、一代の文豪の未完成の制作として、愛読者の群に事件の筋や諸々の人物の性格、心理の葛藤、推移を思うがままに想像させたり、揣摩（しま）させたりする点に於いては、却って終りある佳什よりもなかなかに尽きぬ興趣を残したのであった。

この未完の小説が、特に僕に取っては忘れられぬ思出をとどむる事となった。その理由を此に書き誌すのも、多少の興味を惹くよすがとなるかも知れぬ。

普及版の漱石全集月報第十九号には、松根東洋城氏の『臨終へまで』という一文が掲げられている。その文の末段に松根氏は、「終に一つ、下の様な贅言を書きそへることを許してもらひたい」と断わって、

「俳聖松尾芭蕉、その女性の弟子園女が許に遊び、饗応の菌(きのこ)を食うてより泄痢を起し腸を病むこと十有四日、此間門人木節の診に托し、多くの門弟縁故に護られて、元禄七年冬、風寒き或日の夕方に物故す、齢五十一。

文豪夏目漱石、その女人の弟子山田夫人の招宴に応じ、落花生を齧(かじ)つてより嘔吐を催し、胃を病むこと十有九日、此間弟子真鍋を主治医とし、多くの家人弟子達に護られて、大正五年冬、天曇る或日の日没に逝く、年齢五十。」

而して、松根氏は更に加えて、人間というものは本人さえ気の付かぬ、深い因縁を背負っているように思われる、という沁々とした感慨を漏らしている。

松根氏の文中、女人の弟子山田夫人とあるは、山田三良博士夫人繁子である。「招宴に応じ」たとは、その年十一月下旬、繁子夫人の妹久子の結婚披露の宴に恩師漱石先生を請じたのであった。かねて胃を病んでいた漱石は、その席上に撮(つま)みものとして列べてあった落花生を、

小量なら別に障りも無かろうと、うっかり食べたのが悪かった。それと前後して大谷繞石氏から遥々(はるばる)送られた小鳥の粕漬だか味噌漬だかを口にしたのと併せて、この落花生が漱石の最後の病の近因となった、という事を僕は後から知ったのであった。而も問題の結婚披露に於いては、実は、この僕が新郎だった、と云ったら、悪友どもは、彼奴にも新郎時代があったのか、と驚歎して哄笑するに相違ないが、今はいささか風塵に老いたりと雖(いえども)、僕も亦嘗て一度は、幾千万の旧郎と等しく、人生の新郎だった事もあるから不思議である。今でも忘れないのは、

当年の新郎新婦が客人を待ち受けているところへ、漱石大人が――たしか令夫人と一緒だったように記憶している――不意に現れた、一寸立ちどまって僕の方を見ながら只一言、「やあ！」と言った声と顔つきであった。僕は久し振りだな、と思った。一高以来、直接教えは受けなかったが、その風姿は遠くから、近くから度々眺めたのみならず、その名講演は両三回聴聞した事もあったからである。只漱石から直（じか）に言葉をかけられたのは、この「やあ！」という挨拶だけであった。僕は漱石の「やあ！」に対して恭しく頭を下げて、感謝の意を表した。生前も

死後も僕の崇敬の念には易りはなかったけれども、文学的大先輩に対する思慕のしるしは唯一度の儀礼が初めてで而も終りであった。加之、その日の午前に文豪は未完成の力作の最後の頁を書いたのであった。而してその最後の頁には、主人公の津田と彼の昔の愛人であった清子とが、或る温泉宿で久し振りで会って、久し振りで交した会話が記されている。

「貴女は何時頃までお出です」

「予定なんか丸でないのよ。宅から電報が来れば、今

日にでも帰らなくつちやならないわ」
津田は驚いた。
「そんなものが来るんですか」
「そりや何とも云へないわ」
清子は斯う云つて微笑した。津田はその微笑の意味を一人で説明しようと試みながら自分の室に帰つた。
二十年前、僕はこの最後の頁を読みながら、「宅から電報が来れば、今日にでも帰らなくっちゃならない」という清子の言葉を反芻して、漱石自ら「あの世から迎え

が来れば今日にでも行かなくっちゃならないよ」と冗談のように言っているところを想像して、この文豪の死に僕が多少の因を科したのを寂然として考えざるを得なかった。固(もとよ)り、父と知らずして父を殺したエディポスの悲歎と云っては誇張にすぎるが、汝の知らざる罪を苦難痛悔せよ、というパスカルの言葉は其後も――漱石忌の近くなる冬の初め頃になると――往々にして思出したものである。

朝日新聞に連載された『明暗』を日毎に愛読していた当時から既に、僕にはこの小説が不純な滓(かす)のようなもの

を読後にのこすのが気になっていた。漱石歿後の翌年早々単行本として世に出た時にも、僕は早速再読するにはしたものの、依然として読後の印象から不快な滓を洗いおとす事が出来なかった。僕は異常な興味を以てこの小説を再読しながらも、主要な登場人物が殆ど悉く気に食わなかった。万一、自分の周囲に、こんな奴等ばかりうようよしていたら、人生は恐らく棲むに堪えぬルパナールになるだろうと思った。先ず第一に津田という主人公が堪らなく厭やだった。彼は虚偽を人間が天から授かった唯一の宝だと確信している、最も卑劣な文化人なの

である。こんな奴と一時間も対坐していたら、僕は必ず思切った毒舌を浴せかけるか、横面を擲(なぐ)るかしなければ、肚の虫が治まりそうもないと思った。単に津田ばかりではない。彼の細君のお延という女性も感服出来なかった。寔(まこと)に我の強い、年が年中「負けるものか負けるものか」と考えながら暮らしているような女房ぶりに強い反感をそそられるばかりだった。津田の妹の秀子も気に食わない。もし僕にこんな妹があったら、毎日、日課として、彼女の天窓(あたま)をコツン、コツンと食らわせた事だろう。殊に吉川夫人に至っては、いやに支配者らしく振舞う図々

しい面に唾を吐きかけてやりたい程であった。それに又、文学破落戸（ごろつき）の小林というのが実に汚穢（おあい）な動物だった。

唯、作者が異常な関心を以て、斯ういう不快な人間どもの性格や心理を分析したり解剖したりしているところから察すると、この作者の脳漿には、何か狂的な胚種が潜んでいて、一面に於いては、特に作者の回避したいものを、背後から別の作者が無理矢理に書かせているのではないかと疑ったのである。而も主なる登場人物はそれぞれ作者の近き周囲に群がるモデルで、それを作者の病的に鋭い想像力が――被害妄想と云ってもよかろう――

克明に描き出しているのが僕には不安になって来た。『明暗』を耽読しながら、僕は何となく、曇ったむし暑い日に、じっとしていても、身体が汗ばんで来るような、不快な気分に度々襲われた。加之、この小説の文体にも、微熱の続く日の頭脳の異様な冴えと肉体のだるさと云ったような趣が伴っていたので、それが一層この作に内在する不健康さとぴったり一致しているように思えて、愈々やりきれなくなった。

「局部魔酔は都合よく行つた。まじまじと天井を眺め

てゐる彼（津田）は、殆ど自分の腰から下に、どんな大事件が起つてゐるか知らなかつた。ただ時々自分の肉体の一部に遠い所で誰かが圧迫を加へてゐるやうな気がする丈であつた。……その重い感じといふものを、何う云ひ現はして可いか、彼には適当な言葉がなかつた。無神経な地面が人間の手で掘り割られる時、ひよつとしたら斯んな感じを起しはしまいかといふ空想がひよつくり彼の頭の中に浮んだ……。

切れ物の皿に当つて鳴る音が時々した。鋏で肉をじよきじよき切るやうな響が、強く誇張されて、鼓膜を

威嚇した。津田は其度にガーゼで拭き取られなければならない赤い血潮の色を、想像の眼で腥（なまぐさ）さうに眺めた。じつと寝かされてゐる彼の神経はじつとしてゐるのが苦になる程緊張して来た。むづ痒い虫のやうなものが、彼の身体を不安にするために、気味悪く血管の中を這ひ廻つた。」

これは津田が痔の手術を受ける時の描写であるが、僕は二十年前、この文章を読みながら、何だか、自分の腰の辺がむずむずして来て、暫くの間は腥い手術室の光景

が気味悪く襲って来るのをどうしても払いのける事が出来なかった。漱石の病的に鋭い感覚が往々にして官能の鋭敏を誇る詩人作家よりも遥かに端的で鮮明なのは何も前掲の描写に限ったわけではないが、視覚も聴覚も触覚も一時に躍動し、それが豊かな想像力と契合してこの描写が迫る程生きているのがいつまでも忘れられなかった。而もそれが漱石の場合に於いては愈々つのり行く美意識（エスプリ・ド・フィネス）と日に日に衰えゆく肉体との調和の破れるところから生ずるように思われて、読む僕に一種の戦慄を伝えたのであった。

小宮氏の『「明暗」の構成』が機縁になって、僕はもう一度この小説を読んで昔の印象と二十年後の読後感とを比較して見ようという興会が湧いて来た。そこで改めて読み直して見たのである。

僕は今まで『明暗』の主人公を津田一人と自分で勝手に極めていたが、それは誤りであった。この小説の主人公は複数で、津田夫婦が単位なのである。夫以外に愛の対象を考えられぬ妻と、妻以外に愛を分ち得る夫との人生に如何なる明暗を生ずるかというのがこの小説のレエ

ゾン・デエトルだった。唯作者の死によって中断されたために、此の小説の最後の頁に至るまで、津田夫婦には一度も明るい光が射さず、不快な暗さだけが彼等を囲繞(いにょう)している。何故なら、彼等二人が噎(む)せ返るような主我主義を自己の優越感と結び付けて、生存の必要条件と観念している以上、各個人の分裂した心意も情操も到底融合する筈はないからである。漱石の数多くの心理小説を通じて、僕は『明暗』ぐらい、個人主義の心理解剖が精刻にして且つ生気があり、而も分析される心理が極めて論理的に一糸も乱れずに推移し展開してゆく述作は稀であ

ると思った。而してこの論理的な心理小説の底には、ヒステリーとも診断し得る怪しい焔が陰顕してプスプスと音を立てて燻(くすぶ)っているようである。『明暗』の漱石は、強靭無比な頭脳を発揮しながらも、絶えず人間悪に脅やかされている夢遊病者の如き印象を与える。夢遊病者が暗夜に屋根の上を歩むような危さを僕に覚えしめるのである。勿論夢遊病者は夢遊状態から醒めぬ間は如何なる危地をも安らかに通り過ぎるだろうが、もし覚めたら命が危いと思った。それほどこの小説には、作家が対象を充分に客観しつつ、而も却って対象が作家を逆襲し、苛

責するような執拗さがある。もし、漱石の想像力の裡に、「論理の病魔」といった胚種が既に初期の作品から潜んでいたのなら、『明暗』に於いては、その徴候が明らかに重い症状を呈している。

小宮氏は同じく『漱石襍記』中の『こゝろ』の解説に於いて言うのに、「比喩的に物言ふ事が許されるならば、『行人』を書いて先生は一度狂気になり、『こゝろ』を書いて先生は一度死んだのであつた」と。僕はかねて、『行人』と『こゝろ』との二篇を以て漱石の二大傑作と

観ていたが、小宮氏の言に接して、氏の所謂比喩は既にアレゴリイの域を脱して象徴になっていると思った。小宮氏の極めて適切な比喩に、更に僕の拙い比喩を加えれば、『こゝろ』を書いて一度死んだ漱石は、『道草』に於いてフェニックス鳥の如く甦ったのである。甦った漱石は健三夫妻を家の中心に据え、彼の一転機とも見ゆる社会小説の一歩を危げに踏み出した。然しその制作には、未だ社会とは明瞭に呼び得ざる、個人の半生の回顧を、道草を食いながら、後に引いていた。それに次ぐ『明暗』に依って、漱石は更に第二の歩みを進めたが、而も社会

小説としては之又自覚が稀薄であった。稍々(やや)社会的な風貌は小林という文学破落戸(ごろつき)の富対貧のイデオロジイとなり、肉の無いメフィスト的傀儡(かいらい)として出没するにすぎない。而して小林には独自の存在なく、寧ろ津田夫妻やその他の有閑者流の姿を説明する為の方便的存在しか与えられていない。加之(しかのみならず)、『明暗』の帰結は則天去私の道徳に依って個人主義が罰せらるる運びらしく思える。然しながら、私を去って天に則(っ)くまでには、その間に、社会生活の現実が横わっているのに、漱石はそれに直面してはいないのである。

飽くまで批判的な漱石に、自然主義の影響が現われるまでには相当長い取捨選択の時日を要した。然るに『明暗』が書かれた時代は、政治的には反抗的感情としてのソシヤリスムと絶望的破壊者としてのソシヤリストが存したにすぎなかった。コンミュニスムやマルキシスムが国民のインテリ層を揺がすには『明暗』以後十年以上を要した。もし漱石にして、その年月を生き長らえ得たなら、『明暗』に次ぐ制作は恐らく、見事な社会小説となったかも知れぬのである。

それに就いて、思い出されるのは大正九年か十年頃の鷗外である。或日僕は山田珠樹、鈴木信太郎と一緒に鷗外を上野の博物館に訪れたことがあった。館長室に案内された三人は鷗外と色々な談を交わしたが、その時館長の机の上には、数冊のフランス書が重ねられていた。それが何れも社会学や社会主義に関するものだった。話は当時、吉野作造教授を中心とした民本主義の方へ移って行った。その時分の鷗外は北条霞亭を書いて、伝記物の方面に新しい鍬(くわ)を入れている最中であったが、民本主義や社会主義の問題にも無関心ではなかった。言葉そのま

まには覚えていないが、鷗外が徐ろに語った意味は、はっきり覚えている。

「デモクラシイのデモは民衆で、クラットは力だろう。民主主義と訳しても、民本主義と訳しても差支えないようなものの、デモクラシイの方は寧ろ民衆に依って、或は民衆の力を利用して、といった臭いがあるのだね。そこで、民本主義の方はどうかというと、之は民衆の為に、己を空しくして民衆の為に、という味があるなあ。だから、民本主義は、実はデモクラシイと言うよりも、デモフィリイと呼んだ方が穏やかなのだ。仏蘭西語で云えば

par（に依って）と pour（の為に）との相違になるのだろう」と言って鷗外は微笑した。その時僕は窃(ひそ)かに、この文豪は今は伝記物を書いてはいるが、将来は社会小説にも相当の野心を持っていると察した。然るに鷗外も亦漱石と等しく、本格的な社会小説には筆を染めずに逝ってしまった。両大家とも、卓(すぐ)れた社会小説家たり得べくして竟(つい)にその業績を遺さずに死んだのは、能(あた)わざるにあらず、未だミリューの熟せざるものがあったと解する他はなかった。何れも、ロマン・イデオロジックの大家であったが、それは飽くまで心理解剖家としてのイデオロ

オグであったので、社会学的なイデオロオグには遂にならずに了ったのである。

久しぶりで、僕は『明暗』を読み直して、色彩に於いては以前の多くの小説よりも、うすめられてはいるが、小説全体の味は頗(すこぶ)る濃厚だと思った。一体漱石の持味は枯淡とか、洒脱とかいうものだろうか。僕は漱石のものなら断簡零墨も殆ど読んで――或ものは再読熟読して――今もなお多大の教えを受けている。全く、漱石は、僕から観れば、文学的恩人の主なる人として――門下た

るの幸福は竟に得られなかったけれども――深く傾倒した文豪であった。而も、漱石の作には、生れながらの野人たる僕にはあまりに濃すぎる味があった。淀んだ水の上に浮いてる油がぎらぎらと日光に輝くようなところが、――もし僕が日本人なら、漱石はどうしても外国人だと思い込むほど――強烈であった。素(もとよ)り、漱石は「節操の毅然たる」人格者ではあったろう。「性情の正直なる」君子でもあり、正義の士でもあったろう。然し、「胸懐の洒々落々たる……悟道の老僧」の如き存在とは凡そ縁の遠い――そういうものを憧憬はしていたろうが――

最も、こってりした人物であったとしか考えられない。蓋(けだ)し、則天去私は永遠に漱石の理想として遥かなる彼岸に霞んでいたことであろう。

勿論、我が漱石は、往々にして、枯淡を悦び、忘我の醍醐味を思念したには相異ない。然し彼の深刻な理知にも、異常に鋭い感覚にも、豊かな想像力にも、淡い影などは何処にも見当らないようである。彼の濃厚な味は、その文よりも寧ろその絵画の裡に一層露骨に表現されている。僕には漱石の絵は、いくら眺めても、涼しくならずに暑くなる。

嘗(かつ)て、二年間を欧羅巴で暮した頃、人工を極度に積み重ねた西方文化の厚みに圧せられて、呼吸するさえ重苦しく、一日も早く日本へ帰って、徒足(はだし)で大地を踏まねば、近いうちに自分はひどい神経衰弱になるに相違ない、と真面目に考えた事が屢々(しばしば)あった。而して、その重苦しい圧迫感が『明暗』読後の感じに酷似しているのである。

小宮氏の『「明暗」の構成』を読んで、たまたま、この小説が二十年前の僕に与えた印象をまざまざと想い起し、更に最近に熟読して、依然として同じ印象を受けた

のである。将来幾度読み直しても、恐らく同じ印象に悩まされるであろうと想像した。

（昭和十年夏）

『坊つちやん』管見

いささか大雑把な物の言いようではあるが、私見に拠れば、露伴・鷗外・漱石・潤一郎が近代日本の文芸苑に

於ける四天王だと思う。この四文豪については、いつか、腰を据えて研究もし、論評もして見たいと、かねて考えていた。然し、四大家の全著作を改めて通読し、精読する余暇を未だ得ぬので――精読のない所に批評はあり得ない、印象批評すら成立し得ぬから――今は纏(まと)まった議論を吐く準備も勇気も持ち合せていない。唯与えられた機会を幸い、漱石の『坊つちやん』に就いて寸感を陳べるにとどめる。

最初に僕が『坊つちやん』を読んだのは、一高時代であった。たしか、「ホトトギス」の秋季増刊に載ったか

と記憶している。その以前から既に大の漱石好きになっていた僕は、寄宿寮の二階で、自ら秋期休霊祭と称する祭日を作って、学校を休んで――この新作を読み耽ったのであった。坊っちゃんが中学の先生になって初めて、任地に着くと、直ぐに東京が恋しくなり、少年時代から自分を孫のように可愛がって呉れた婆やの清（きよ）に手紙を書く。「きのふ着いた、つまらん所だ。十五畳の座敷に寝てゐる。宿屋へ茶代を五円やつた。かみさんが頭を板の間にすりつけた。昨夜は寝られなかつた。清が笹飴を笹ごと食ふ夢を見た。来年の夏は帰る。今日は学校へ行つ

てみんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今に色々な事をかいてやる。左様なら。」

この手紙を読んで、僕は「俺もこんな手紙を書いて見たいなあ」と思った。

二度目に『坊つちやん』を読んだのは、猿之助が本郷座で『坊つちやん』を演っていた頃である、芝居の『坊つちやん』は観る気が起らなかったが、芝居で演っているという噂が機縁になって芝居には行かずに、再びこの小説を読んだのである。その時も、批評的な気持にはな

らずに、全く受動的な態度で、ただただ面白く芽出度く読み了った。

此度が三度目である。依然として、面白く読んだが、此度は多少批評的に読んだ。

凡そ性格描写という事は、何処の邦でも、小説道の重大な要素の一つだろう。作家が性格を描いて見事に成功した場合に、仏蘭西人は往々、性格を描いて典型（タイプ）の域に達したと褒める。スタンダアルのジュリヤン・ソレル（『赤と黒』）、フロオベエルのボヴァリイ夫人、バルザックのペエル・ゴリオやクウザン・ポンスなどがその好

い例だろう。之に反して、性格を描いて類型(タイプ)に堕したと謂(い)ったら、それは明かに失敗の場合である。実例は各国の文学に数限りなく存在して而も殆ど悉く忘れられてしまった。そこで、タイプという言葉にも二様の意味が含まれている事が解る。典型と類型とである。

ところで、『坊つちやん』は性格を描いた小説だろうか。そうではなかろう。『坊つちやん』は類型を目指して而も類型を描き得た小説である。初めから作家が類型を描こう――或は類型を通して作家の理想を開陳しよう――と目論んでいるのだから、類型を描き得て、作家の

意が読者に伝わればそれで『坊つちやん』は成功と謂わなければならない。『坊つちやん』が出た当時、「性格が描けておらんじゃないか」などと見得を切った鈍間な批評家もいたように覚えているが、そういう手合がドオデエの『タルタラン』を読んだら、やっぱり痴呆(こけ)の一つ覚えで「性格が描けておらん」と嘯(うそぶ)くかも知れない。『坊つちやん』とは、その題からして類型に与えられた名である。『坊つちやん』の中に出て来る人物は坊っちゃん始め、狸も赤シャツも山嵐ものだいこもうらなりも清も、悉く類型ならざるはない。而もそれらの類型が何

れも潑剌として活躍している。それは、類型が作品の上では飽くまで類型として取扱われていながら、読者の胸裡には、類型に相当する生きた性格――人物と言った方がいいかも知れぬ――をまざまざと描かしむるからである。そこに天才と凡才との岐路が見える。

『坊つちやん』ほど善玉と悪玉がはっきり岐れている小説は漱石の作でも異例だろう。一方に坊っちゃん、山嵐派、他方に狸、赤シャツ党が官軍と賊軍のように対峙(たいじ)している。善派には、うらなりや清のような正直な弱者が影の如くつつましやかに控えているが、悪党にはのだい

こや卑劣な田舎中学生が騒々しく加担している。各大学の争議と比べると、善悪はまことに一目瞭然である。機械的といえば機械的であるが、油が能く利いているので車が快く回転してゆくのである。

『坊つちやん』における漱石の「悪」とは虚偽である。「嘘は泥坊のはじまり」という特に江戸っ子の愛好する道徳である。宗教的な「罪」の意識は何処にも見当らない。狸の政治家的虚偽、赤シャツの感傷的虚偽、のだの幇間(ほうかん)的虚偽。而して善とは虚偽を打破する勇気である。坊っちゃんの無鉄砲と啖呵(たんか)であり、山嵐の機略と腕力で

ある。両人の対話。

―君は一体どこの産だ。

―おれは江戸つ子だ。

―うん江戸つ子か、道理で負け惜しみが強いと思った。

―君はどこだ。

―僕は会津だ。

―会津つぽか、強情な訳だ。

―美しい顔をして人を陥いれる様なハイカラ野郎

……と君は云つたらう。

――うん。

――ハイカラ野郎だけでは不足だよ。

――ぢや何と云ふんだ。

――ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫つ被りの、香具師（やし）のモモンガーの、岡つ引の、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云ふがいい。

――おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ、第一単語を大変沢山知つてゐる。それで演説が出来ないのは不思議だ。

――……全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、彼奴のおやぢは湯島のかげまかも知れない。

――湯島のかげまた何だ。

――何でも男らしくないもんだらう……。

全く坊っちゃんの語彙は豊富である。銀座が煉瓦（れんが）で万世橋がめがね、官吏が官員さんでお抱車に乗っていた時代の東京弁を僕は久し振りで味わった。

この小説は虚偽の犠牲になった代表的善玉が悪玉に鉄拳と鶏卵の交叉射撃を乱発して溜飲をさげた挙句、虚偽

の巣である田舎の小都市を引上げ、明るい東京に舞戻って梟(けり)がつく。

僕は『坊つちやん』を類型の小説だと言ったが、それにつけても、比較したくなるのは、昨年、岸田国士君が訳したルナアルの『にんじん』である。『にんじん』は類型小説ではない。性格を描いて、典型の域には達して居らぬようだが、描かんと欲した性格は充分に描き得た小説である。此の二つの作は、全く作家の態度を異にしている。ルナアルが凝視しているのは『にんじん』――作者自身の少年時代――の心である。漱石の描いている

のは『坊つちやん』の目に映じた世相であった。『にんじん』は実の子でありながら、母親から疎(うと)んぜられ、虐げられた結果寧ろ世間の孤児を羨むまでに捩(ひね)くれてしまった。

誰でも思い通りに孤児にはなれない。

といった苦(にが)い言葉は『坊つちやん』の口からは漏れる余地がない。にんじんは地方人で、坊っちゃんは都会人だった。にんじんは凝結し、坊っちゃんは蒸発する、とでも謂うのか。

全く、坊っちゃんはちゃきちゃきの江戸っ子に相違な

い。坊っちゃんは江戸っ子である事を誇りとしている。江戸っ子は嘘をつかない。正直で、恬淡(てんたん)で、癇癪持ちで、損ばかりしている。地方人は狡猾で、卑怯で、けち臭く、陰険で、慾張りである。『坊っちゃん』の到るところに、田舎漢(いなかっぺい)に対する憎悪と侮蔑が露骨に出て来る。坊っちゃんは述懐して、――それにしても世の中は不思議なものだ。虫の好かない奴が親切で、気の合った友達が悪漢だなんて、人を馬鹿にしている。大方田舎だから東京の逆に行くんだろう。物騒なところだ。と。

坊っちゃんが田舎を呪う時には必ず東京で彼の帰るの

を待っている婆やの清を想出すのである。清からの手紙にも、「田舎者は人が悪いさうだから、気を付けて苛い目に遭わない様にしろ」と書いてあったり、彼は自分が遭遇した不愉快な事件を思い出して、「こんな事を清に書いてやつたら定めて驚くことだらう。箱根の向うだから化物（ばけもの）が寄り合つてるんだと云ふかも知れない」とも考えたり、愈々田舎がやりきれなくなると、「どうしても早く東京に帰つて清と一所になるに限る。こんな田舎に居るのは堕落しに来てゐるやうなものだ」と歎いている。蓋し坊っちゃんに取っては、皺くちゃ婆さんの清は浄い

都のサンボオルでも女神でもあった。但し清のようなタイプは必しも東京の特産物でもないので、外国にも此の種の型は必しも珍らしくはない。僕は『坊つちやん』の清から『ユウジェニイ・グランデ』（バルザック）の中の老女ナノンに、「まごころ（アン・クウル・サンプル）」（フロオベエル）の中の老女フェリシテにまで想いを馳せた。此の種の女性は何れも裏面の無い聖女で、いつ死んでも、手ぶらで安心して天国へ往ける人格者である。殊に、彼女等から受ける印象は、何処か、美しい而も淋しい自然の眺めや、寂寞たる心境に訴える或種の音楽に似ている。『坊つちや

ん』の最後の数行もその例に漏れない。

「おれが東京に着いて下宿へも行かず、革鞄（かばん）を提げた儘、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊つちやん、よくまあ早く帰つて来てくださつたと涙をぽたぽたと落した。おれも余り嬉しかつたから、もう田舎へは行かない、東京で、清とうちを持つんだと云つた。……死ぬ前日おれを呼んで坊つちやん後生だから清が死んだら坊つちやんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊つちやんの来るのを楽しみに待つて居りますと云つ

た。だから清の墓は小日向の養源寺にある。」

此の数行はフロオベエルの『まごころ』の最後の数行――老女フェリシテの死――と比較して読むと興味が深い。

坊っちゃんが、江戸っ子を善、正と信じ、田舎漢を悪・邪と観ずる癖は、漱石の神経と密接な関係がある。凡そ潔癖に幾(ちか)い正義の士が、傑(すぐ)れた芸術家であり、殊に異常に鋭い感覚を備え、特に彼が生まれながらの都会人であった場合には、彼にとっては、都以外は凡て外国であ

り、敵国でもある。漱石はその生涯を通じて、強烈な正義感――寧ろ悪に脅かされ、悪を憎む心――と病的に乱れた神経との交叉期には、幾度か此の敵国に悩まされた事があったらしい。四国に於いて、倫敦（ロンドン）に於いて、地方色が無遠慮に侵した後の東京において。

かかる場合の敵国人は漱石の目には悉くスパイとして映るのである。これは恐らく、病理学的に観察し、診断せらる可き、強迫観念、被害妄想に等しいものであろう。然し、之あるが為に僕は漱石の天賦の聡明から往々にして怪しく美しい火花が散るのを感ずる。漱石門下でも最

も深く師に私淑した小宮豊隆氏は嘗て僕に、「漱石の聡明には何処まで行っても割り切れぬ怪しき狂いがある。それを美しいと思う」と語った事があった。豊隆の所謂「割り切れぬ美しい狂い」と僕の感ずる「怪しく美しい火花」とが果して同じものであるか否かは詳(つまびら)かにせぬが、兎に角「或る狂い」が既に初期に属する呑気な『坊っちやん』の裡にも感じられるのである。坊っちゃんが田舎中学生の悪戯から、布団の中の夥(おびただ)しいバッタの伏兵と戦う狂乱状態は、生涯漱石の脳裡に、周期的に襲いにかかったかと思われる。

さもあらばあれ、『坊つちやん』の文章は実に一気呵成で且つ暢達(ちょうたつ)である。起句の「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしてゐる」から結句の「だから清の墓は小日向の養源寺にある」まで、些かのたるみも見せず、一瀉(いっしゃ)千里の勢いである。興に乗じて文を行(や)る作家の風丰(ふうぼう)は恰も満帆の順風に波濤を蹴る概(おもむき)がある。惟うに『坊つちやん』時代が、漱石の精神と肉体と希望と境遇とが適度の調和を得た、作家の楽しい一季節であったように思われる。

「だから清の墓は小日向の養源寺にある」

この結句は如何にも懐かしい。清は、下町に育って山の手に死ぬ律義な忠貞な老女の好個の型であろう。清は既に類型を脱して典型に迫っている。

（昭和九年春）

『彼岸過迄』寸観

『文学』一月号所載、片岡良一氏の『「彼岸過迄」の意義』と題する論考を極めて興味深く読んだが、それが機縁となって、僕は久しぶりで、この小説を読み直して見た。

漱石の中心思想の定型を『彼岸過迄』に求める見方は、僕にも異論がない。片岡氏の謂う如く、『彼岸過迄』は、作者のその以前の思想を濾(こ)して纏め、その後の思想を予告し、準備するものである。而も、予告でも準備でもありながら、既定的なものを大体包含している点に於いて

は、片岡氏の『「彼岸過迄」の意義』なる一文は寔(まこと)に読みごたえのあるものであった。

僕は今ここで、この小説の意義を考え、主人公須永市蔵の性格・心理を詳説するつもりではない。ただ、二十何年か前、帝大法科の学生であった僕を深く動かした、当年の思出といったようなものを少々書きつらねて見ようと思う。

『彼岸過迄』が初めて朝日新聞に掲載されたのは明治四十五年の一月からであった。僕は毎朝この小説を読むの

が無上の楽しみだった。「風呂の後」、「停留所」、「報告」、「雨の降る日」と段々読んでいって、竟(つい)に「須永の話」に至って、僕は異常な共感と親しみを以て、青年須永市蔵を愛し始めたのであった。須永は、それまで僕が実人生に於いて知っていた如何なる秀才よりも聡明で奥床しい人物であった。もし斯かる青年が実際に僕の近くに現われたら、僕は彼を生涯の友として易(かわ)らぬ交りを結び得るだろうと思ったのであった。久しぶりで『彼岸過迄』を読んで僕は永く隔てられていた旧友にめぐり会ったように想い、当年の彼への思慕を新たにしたのである。

須永の女性・恋愛に対するストイックな諦観が僕には何よりも頼もしく思えた。既に少年期から女性に対する尊敬の念などは微塵も無く、恋愛は美男美女の特権として全く他界の消息だと思っていた僕が、須永が完全に嫉妬を克服して千代子を綺麗に諦める過程を極めて当然だと思った。彼の如く「我」を凝視する男には、恋愛は誘惑であっても、魅了とは成り得ないだろうとも思ったのである。明治末期インテリゲンチャの消極的個人主義は須永の裡にその代表的存在を牢乎(ろうこ)として基きあげている。須永が法科の卒業受験生でありながら、既に夙(はや)く、

社会生活の夢や青雲の志や富への憧憬を全く放下して、狭いながら、自我の奥に人生探究の耿々（こうこう）たる瞳を据えたところは、当年の法科の秀才よりも寧ろ文科の人材に往々見受けた貴い型であった。それは今の法・文学部の学生気質と比較して著しいコントラストを呈している。固より僕は今の学生が生活の落伍者たらざらんとする就職焦慮を軽侮する意志は毛頭ないのみか、現代の社会苦が幾万の学生を卒業の門前に脅かしているのを眺めて心から同情を禁じないのだが、それにもかかわらず、余りに実際的になった今の学生に二昔前の個人主義思想と数

年前までの批判反抗の熱意の衰えたのを遺憾に思うのである。加之、社会的イデオロオグの群が個人主義を弊履（へいり）の如く捨てた――捨て得ると思った――ところにも重大な欠陥があったのではないか。インテリ層の現代批判が総般的に抑圧されたまま、殆ど無風状態に陥いったのは、決して弾圧の奏功ではなくして、インテリの苦悩にインテリ自ら鎮静剤を盛ったとしか思えぬのである。

個人主義も自由主義も、幾多の欠点を含むとは云え、要するに人間が人間らしくなり度い自然の衝動から確乎たるイデオロジイを樹立するまで、幾世紀を重ねて積み

あげた精神的肉体的の成果なのである。我が邦のマルキストやコンミュニストの中に、一人として自己の名を署(しる)さずに所論を公にした者が無かったこと、自己の名を抹殺するのが公論の必須の条件であるとまで自覚した者が皆無であった事実に徴しても、個人主義や自由主義が如何に深く近代人の深所に徹していたかを知る可きである。現代の青年は、もう一度個人主義や自由主義や孤独や懐疑を沁々顧みて見ても決して徒労には終るまい。

片岡氏の文中には次の一節がある。

『須永の話』の後に『松本の話』をつけ加へた作者は

さうした孤独と懐疑との虜となつた須永を、更にその母からも引離して――彼が彼女の子ではなく、今は生死も知れない女の云はば不義の子であつたことを明かにして、彼を益々孤独の底に突落した後、其処から更に『考へずに観る』といふ境地に浮み上らせることによつて、其処に静かに調和された世界のあることを明示してゐるのであつた」斯くて、片岡氏は、更に漱石のそういう見方は孤独地獄や厭世哲学の正しい解決でもなく、寧ろ解決の抛棄乃至(ないし)問題の抛棄であり、主観的な飛翔、感覚世界への逃避である。漱石が須永一人の主観的な救いで満

足しているのは、「個人主義といふものを正しく周到には理解せず、これを単なる為我主義としてのみ受取つてゐたのであつたことが、知られると同時に、その思想的立場を最後まで抛棄できなかつた人であつたことが、知られるのではないかと思ふ。それが出来たら、漱石はもつと俗化するか（俗化といふよりも社会化と云つた方が適当であらう）でなければより清澄な宗教的超脱に行つた筈で、『考へずに眺める』――云換えれば、安全地帯にゐて、なほ危険区域に執着するといふにも似た、そんな不徹底さに止まる筈がなかつたのだから。」と云って

いる。

然し乍(なが)ら、漱石は『行人』と『こゝろ』に於いては竟に安全地帯を脱して危険区域に入り、狂から死の境を彷徨していたと云って誤りではないだろう。『行人』や『こゝろ』の主人公は既に孤独地獄をインテリの特権として優越感と結び付けるような奢(おご)った心は持つにも持ち得ず、却って危地に陥いって、新たなる安全地帯――則天去私の境地――を欣求(ごんぐ)している。但、僕には、この種の孤独地獄と則天去私との間には、近代的な社会生活な

り市民生活なりの自覚が生れねばならぬと思われるのだが、漱石は――鷗外も亦――そういう社会意識が日本のインテリ層を席巻（せっけん）する以前に死んだのであった。それは返す返すも惜しいことであった。しかもそれ以上に僕等が物足らなく思うのは鷗外・漱石以後、両大家の貴い遺産を充分に活用して、見事な社会小説を描きあげた傑物は未だ一人も出ないことである。然し、そういう方面の佳作も追々現われて来るに相違ない。口や筆で社会とか市民とか言っても、それが実感となり血縁となって自ら社会小説が生れるには猶お十数年或は数十年の歳月を要

することだろう。

それは兎に角、『彼岸過迄』の「考えずに眺める」境地を一概に不徹底と断ずるのは必ずしも当るまい。若しポオル・ヴァレリイの謂う如く、無限の欲望の肯定に欧羅巴（ヨーロッパ）精神のレエゾン・デエトルを求むるなら、僕等は之に対して、却って無限の欲望に幸福の破滅を観じ、寧ろ無限の欲望を純粋諦観の域まで浄化する自我陶冶の道を修し得ると思うのである。而もそこから社会的ソリダリテへの新たなる歩みが踏み出され得るようにも思われるのである。

話が稍々理に墮ちたが、僕は片岡氏の好論文に刺戟されて『彼岸過迄』を改めて読み直し、更に『行人』と『こゝろ』をも読み直して、漱石を追懐し、偉大なる故人を敬慕する楽しさを味わった。

僕は漱石に関して何か考える度毎に、必ず小宮豊隆氏を思出さぬことはない。小宮氏の漱石に於けるは恰も鏡花の紅葉に於けるが如く、何か独占的な愛慕宿縁が存するように思われる。僕は或時、好奇心から、小宮氏に訊ねたことがあった。

――君は自分で漱石を評論するのは勝手だが、他人がそれをやるのは厭なのだろう、と。小宮氏は笑いながら、「ああ然うだよ」と答えた。

僕は小宮氏のこの答に些かの反感も抱き得なかった。寧ろ、そうあり度いという気持ちさえ起った。今も、僕は小宮氏の「ああ、然うだよ」という言葉を反芻しながら、この拙文を草したのである。

（昭和十二年春）

日本文学電子図書館

夏目漱石

著　者：辰野 隆
制作者：宮澤一郎
底　本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」
中公文庫、中央公論新社
2015年２月25日 初版発行

日本文学電子図書館